

私立大学情報教育協会

平成 21 年度第 7 回 CCC 芸術系グループ運営委員会議事録要旨

- I. 日時 平成 22 年 1 月 27 日 11:00～13:20
- II. 場所 私情協事務局会議室
- III. 出席者 久原（座長）、西垣、有馬、井澤（記録）、宮田（遠隔）各委員
井端事務局長、森下、恩田

議事概要

事務局より、情報教育協会作成の「学士力考察」の報告・提言にまつわる現況報告と今後のスケジュールについて説明があった。

学士力の養成を実現するための手段として、分野固有の教育に必要な「情報活用能力」の教育が不可欠と捉える。運営委員会に取りまとめた「学士力考察」をふまえて、分野別教育での「情報教育」の方向性について検討していく。

* 今年度（本日）は以下の事項について可能なかぎり検討することとした。

- ① 到達目標
- ② 到達度：到達目標ごとの具体的な達成水準
- ③ 教育内容：到達目標ごとの教育内容のイメージ
- ④ 教育方法：到達度ごとの教育方法の理想的なモデル
- ⑤ 到達度確認の測定手段

* 来年度の展望

22 年度以降はこの事項専門の研究組織（情報教育研究委員会。各分野グループから委員を選抜）で研究を続ける。芸術系グループからは 久原委員を指名。

本日の検討議題に入る。

まず、会議前に宿題とされた議題に関する各委員の意見の説明。

委員：資料③に基づき、実際の授業の概要説明。

委員：資料④に基づき、実際の授業の概要説明。

資料②の委員の意見を紹介。

委員：資料②-2に基づき、実際の授業の概要説明。

* 検討議題についてのまとめ方についての議論。美術・デザイン分野での共通項の検討。

- ・ 美術とデザインを分けて議論してはどうか。情報関連で開きがあるのでは。という提案にたいして、
 - ・ 美術分野にも情報ツールは使用されている。クロスオーバーな表現分野は多い。
 - ・ アナログな表現手段しか活用しない学生は多い。
- と、それぞれの意見。
- ・ アナログな表現手段しかしない学生にも活用できるものとして、情報発表ツールなどがある。

議論のまとめとして。美術とデザインを分けるのではなく、

○ 「表現にデジタルを使う人」の場合と「表現にデジタルを使わない人」とに分け、それぞれに必要な情報教育を考えると結論。

○ 先にとりまとめた芸術系グループ学士力案に基づいて考える。

学士力案1（理論）を到達目標1、

学士力案2、3を到達目標2として、以下のように設定することとした。

★★表現に情報技術を必要としない教育と表現に情報技術を積極的に活用する教育に区分し、双方の教育に共通する到達目標を1、情報技術を積極的に活用する教育における到達目標を2とする。

上記に従い、到達目標1と到達目標2それぞれについて議論の結果以下のように文章化した。なお、★★を前文におくこととした。

★到達目標1

視覚芸術表現を理解するために情報通信技術を活用できる。

到達度

- ① 美術・デザインに関する適切な情報（社会・歴史・科学など）を真正性に配慮して検索・収集・蓄積できる。
- ② 情報共有や相互理解の実現に情報通信によるコミュニケーションツールを活用できる。
- ③ 作品をデジタル化し、情報通信技術を活用して発信できる。

教育内容・教育方法

- ①は、信頼できる情報の所在を理解させるとともに、剽窃や著作権などに配慮して課題研究させる。
- ②は、コミュニケーションツールを授業の中で使用させ、その特性を理解させる。
- ③は、演習を通じて映像・音声などを含んだメディアの基本技術を体験させる。

到達度確認の測定手段

①から③は、課題・作品研究の発表を通じて上記の知識・理解・技能を確認する。

★到達目標 2

視覚芸術を表現するために情報通信技術を活用できる。

到達度

*以下の到達度は専攻により異なるので、必要に応じて参考にさせていただきたい。

- ① グラフィック・描画・動画ソフトを活用できる。
- ② W e bやサウンドなどの制作にプログラミングができる。
- ③ 3Dやデータベースなどを活用できる。

教育内容・教育方法

①から③の基本的な情報技術を講義などにより習得させる。その上で実習などで適切な情報技術を用いて作品を制作させる。

到達度確認の測定手段

①から③は、課題・作品研究の発表を通じて上記の技能を確認する。

以上、本日の議題についての議論を終了。

最後に、事務局より、芸術系グループ運営委員会委員を追加したく、各委員に新規委員の推薦を打診されたが、各委員とも即答できず、持ち越しとなった。